

## 個人蔵 法然上人像 宝瓶御影

はじめに

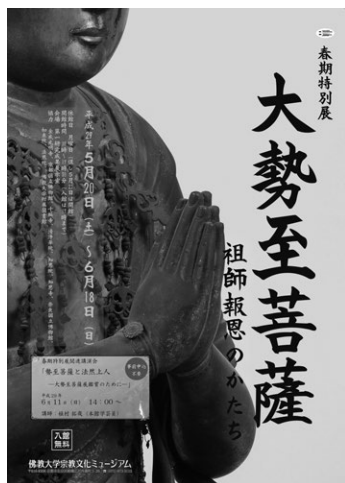


図1. 「大勢至菩薩—祖師報恩のかたち—」展

佛教大学宗教文化ミュージアムでは、平成二九年度春期特別展として「大勢至菩薩—祖師報恩のかたち—」〔図1〕を開催した。<sup>①</sup>当展覧会の開催趣旨は、法然上人が勢至菩薩の化身と語られ信仰されてきた背景とその信仰が造形化されたものについて紹介することを主眼とし、浄土宗における祖師信仰の側面について理解を促そうと企画された。知恩院勢至堂勢至菩薩坐像を根本とする一連の独尊勢至菩薩坐像の造形的系譜を中核として、その信仰を語り継いできた知恩院本

植村 拓哉

『法然上人行狀絵図』などの各種法然伝、そして同信仰から派生したと考えられる宝瓶御影を一堂に展示することを試みた。それによって同信仰における歴史としての縦軸、広がりとしての横軸を概観しようとしたものであった。

恐らく勢至菩薩を、ましてや独尊のみを照射した展覧会はこれまでになかったものと思われ、多方面から様々なお声を頂いたが、佛教大学の附属博物館であるからこそ可能であり、開催する意義のある展覧会であったのではないだろうか。当館としては初めての国宝展示が行われた点でも有意義なものであったように思われる。

同展においても、独尊勢至菩薩像に加えてその信仰の基層を同じくする宝瓶御影は極めて重要なものとして位置づけており、ご所蔵者様の深い理解とご高配のもと計四幅の同御影が出陳され、並べて展示するという得難い機会を与えていただいた。

本稿にて紹介する法然上人像は、その展示準備を進めている折に、個人家に伝来する御影についてみて欲しいとのご依頼を受け拝した作例である。これまで学界に全く知られていなかった未見の宝瓶御影であり、後述のように銘によって制作年代や、制作背景がおおよそ明らかな点でも興味深いものである。先に触れたような信仰史の縦軸を語るうえで、提示できる資料の不足を感じていたなか、眼前に現れた法然上人を拝した時に、このような出会いがあるものかと感じたことが思い返される。所蔵者のご快諾を得て調査を実施し、同展覧会にも出陳させて頂いた。

本稿は、その新出資料の基本的な情報および賛・銘の内容について検討を行い、紹介するものである。

一、個人蔵「法然上人像(宝瓶御影)」の概要について

法然上人像(宝瓶御影)〔図2〕 絹本着色金泥 一幅一鋪

寛政三年(一七九一)

〔法量〕

本紙…縦一一七・三 横四三・六

全長…二〇〇・〇 八双…六〇・〇

軸長…六五・五 軸径…二三・五

〔賛及び銘文〕

「本紙上部賛」〔図3〕

法然本地身 大勢至菩薩

為度衆生故 顕置此道場

我毎日影向

擁護帰依衆

必引導極楽

若我此願念

不令成就者

不取正覺 永

右画賛者大師自画自賛也

今茲

寛政三辛亥春三月於

功德院百万遍妙好華宣知恩五十三世賜紫

「本紙左下方銘」〔図4〕

杜多宣阿謹摸写(白文方印)「不読」(朱文方印)「弁阿ノ之印」

「旧函蓋銘」〔図5〕

真筆自画自讃

泉州堺長泉寺云

南ノ十萬開山十万人

感得今現在彼寺也

大師上人宝瓶顯現真影写

一鋪

〔伝来〕

・所蔵者の口伝によれば、兵庫県伊丹市に所在する浄土宗法嚴寺より譲られたという。その時期や経緯について

ては詳らかでなく、近親者等の記憶によって所有の確認が遡れるのは戦前頃までか(昭和四〇年代頃)。

〔備考〕

- ・記銘によって、寛政三年(一七九一)三月に浄土宗大本山知恩寺第五三世転蓮社法誓宣阿弁問「?」一七九四」が発願し、制作したものと考えられる。また、本資料もその頃の作例とみてよい。
- ・法巖寺は、『蓮門精舎旧詞』第四五冊「知恩寺末」項に、「○法巖寺迎接山昆庄院 摂州河辺郡伊丹 起立大永年中開山真蓮社岌誓上人元龜二壬申年十一月二十七日八十歳寂」<sup>(2)</sup>とある。
- ・現所蔵者のご先代が約二〇年前頃に修理に出されたという。表装もその時新たに仕立て直されたと考えられる。



図2. 法然上人像 個人蔵

個人藏 法然上人像 宝瓶御影(植村 拓哉)

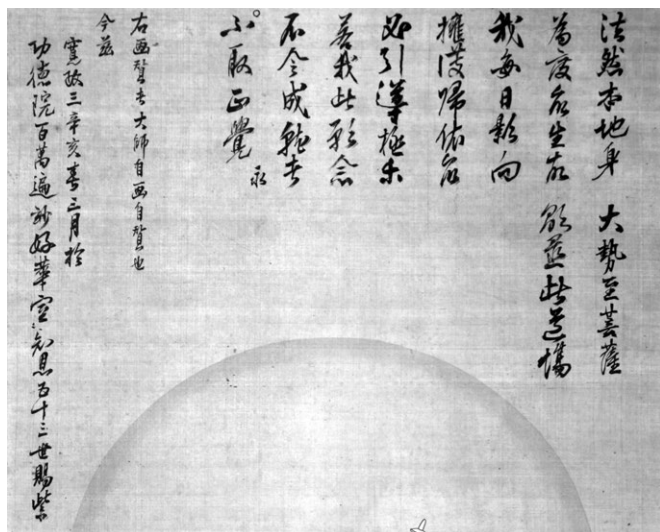


図3. 本紙上部賛



図5. 旧函蓋銘

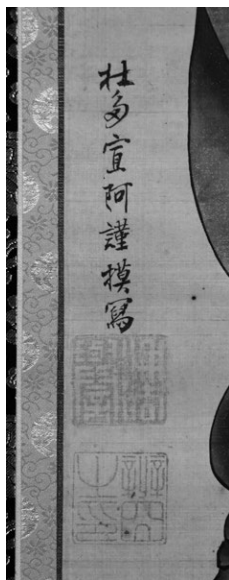


図4. 本紙左下方銘

## 二、個人蔵本の特色について

個人蔵本は、頭部の上に「宝瓶」が載り、向かって右を向き、胸前で数珠を繰る立像形式の法然上人像である。図像的には同種の遺例とほぼ同様といえるが、これまでまったく知られていなかった宝瓶御影である点で注目される。その特色について古例として知られる十輪寺本「南北朝時代」、知恩院本「室町時代」を比較対象として、相違点を中心に眺めていきたい。

描線に着目すると頭部の輪郭を細く、衣は比較的濃くかたさの見られる描線が看取される。全体的な描写もごく一部に相違が見受けられるものの、十輪寺本、知恩院本に近似しており、このかたさは摸写に起因する謹直性と考えて良いだろう。

相違点としては、細部ながら右臂あたりで結ぶ五条袈裟について、十輪寺本、知恩院本では結び目の部分で背面をめぐる袈裟の端を覗かせているものの、個人蔵本では描かれていない。この点、後述のように函蓋銘にあるように、長泉寺伝来本に同様の形式を見ることが出来るのではないかと期待をしていたが、長泉寺本も十輪寺本などと同様に背面の袈裟の端を覗かせており、現状では個人蔵本のみに表されていない特徴といえる。

また、左脇辺りに腕を屈臂したことで四本の衣文線が生まれているが、個人蔵本では上から三本目の衣文線が上向きに跳ね上げられており「図6」、十輪寺本などでは下向きに払うように描かれている。細部ではあるが、これらの特徴的な相違点から、摸写の際に参考とした原本の存在が明らかとなることが期待されたが、現在確認されている諸本については同様の特徴を見出すことが出来なかった。





図6. 右肩衣文線部分

に古例を忠実に写すことを意図して制作されており、出来映えも秀でた優品として評価できるだろう。

### 三、賛及び銘文の検討

個人蔵本は、本紙上部賛後半部及び左下方に記された銘によって、ある程度ではあるが制作事業が窺われる点でも興味深い。

上部賛から見えていくと、前半の「法然本地身(中略)永不取正覚」にあたる部分は、宝瓶御影の現存最古本である十輪寺本の上部賛の前半部分と同文であり、さらに、知恩院本『法然上人行状絵図』巻三五第二段で、讃岐国小松庄の生福寺にて法然が滞在中に阿弥陀仏の脇侍を造り加えることを発願し、勢至菩薩を自ら造った折に遺した置文とされる詞書と同文である。後半部分では、この画賛が大師(＝円光大師、法然)の記したものと同じであ

その他、衣の皺によって生まれる陰影などを墨の濃淡で表現している点などは、希薄ながら知恩院本にも看取されるが、個人蔵本はより濃く強調されていることから、描写の現実感を意識した表現をとっていると考えてよいだろう。このような点はむしろ現在知られている諸本のなかでは金戒光明寺本「江戸時代」に近い特色をみせる。時代的な傾向として捉えることもできるだろう。

本項では、同種の作例と比較して相違を見出すことでその特色をみてきたが、個人蔵本は細部の異同は認められるものの基本的

ることを述べ、寛政三年(一七九一)三月に「功德院百万遍知恩」の五三世である「妙好華宣」が紫衣を賜ったことを記している。これを記念し本御影が制作されたと考えて良いだろう。「功德院百万遍知恩」というまでもなく、百万遍念仏の根本道場たる浄土宗大本山長徳山功德院百万遍知恩寺を指していると考えて良い。また前項の「備考」で触れているように、この賛によって知恩寺第五三世転蓮社法誉宣阿弁阿に関するものであることがわかる。

『三縁山志』八及び『百万遍知恩寺誌要』<sup>(6)</sup>によると、弁阿は増上寺に学び、天明元年(一七八二)に小金東漸寺第三四世として晋山、その後同四年に知恩寺に転住したという。天明八年二月に起った大火によって門末類焼一八箇寺に金と米を施し、同年には厄払いに百万会を修したことがわかる。また、『獅子伏象論』中末には、天明六年(一七八六)一月一日に「長徳山知恩寺五十三世法誉宣阿弁阿」が校合を終えたことを記すほか、本書にくつかの注記をのこしている。その他の事績については詳らかでない。なお、『獅子伏象論』は弁阿が「宣阿」と号していたことを記す今のところ唯一の資料である。

「妙好華」とは念仏を修する人を称賛する喩えで、弁阿の阿号である「宣」を付している。弁阿の事績については先に触れたものの他に詳細には知られず、紫衣を賜ったことも本資料が初見である。

左下方銘では、「杜多宣阿」が「謹摸写」したことがわかり、その下に捺された朱文方印に「弁阿ノ之印」とある。「杜多」は頭陀と同じく dhūta の音写語で、煩惱の塵垢を振り払うため衣食住に関する貪りなどを律する厳しい出家生活法を指すといひ、それを肩書のように示して用いていると考えられる。<sup>9)</sup> 拝した当初は本銘の位置的に、また「謹摸写」の字句からみて、作者の署名がなされているものと考えていたが、妙好華や杜多などを名に付す念仏者の弁阿が自ら筆をとったとは考えにくく、素直に発願者としての署名と見るべきものと考えている。

また、本御影は現在新たに桐箱が設えられているが、旧蓋が共に納められており箱書が確認できる。本御影が法然の「宝瓶顕現真影」を写したものであり、泉州堺の長泉寺の伝えとして、十万上人が感得したものが長泉寺に伝来することを記している。

## おわりに

以上、個人蔵になる法然上人像について、その概要及び賛の内容について検討を加えた。

個人蔵本はこれまで学界に知られることの無かった新出作例であるとともに、制作にかかる事情についても触れられており、さらに賛にあるように寛政三年に制作されたことがわかる法然御影の基準作としても注目すべき作例である。さらにいえば、その発願者である弁阿の事績についても新たな情報を加えるものとしてもその価値が見いだされる。

個人蔵本をめぐっては、波及すべき問題が未だ残されている。例えば、ひとつに移動の問題などが挙げられるだろう。現所蔵者より以前に伝来していたという法嚴寺が知恩寺末であることは概要の「備考」項で触れたとおりで、その本末関係から一応の説明が可能となるが、知恩寺、あるいは弁阿上人からいかなる経緯で移され所有に至ったのかは明らかでない。同じく、法嚴寺から現所蔵者への移動の過程についても不明と言わざるを得ない。いまひとつに、「謹摸写」としたという粉本の特定である。これは蓋銘から勘案すると長泉寺本を写したと考えてよいだろうが、先にも触れた様に、特徴的な細部の相違が留意されるところである。十万上人との関わりで同じく賛のある十輪寺に伝来する二本のいずれかであった可能性も十分に残されるが、今後の課題としておきたい。

ここに新資料を紹介することで、御影研究の発展の一助となれば幸いである。

〈注〉

(1) 展覧会概要については左記の通り。

名 称…大勢至菩薩—祖師報恩のかたち—

開催期間…平成二九年五月二〇日～六月一八日

会 場…佛教大学宗教文化ミュージアム第一研究成果展示室

講演会…「勢至菩薩と法然上人—大勢至菩薩展鑑賞のために—」

平成二九年六月一日 午後二時 講師 植村拓哉

(2) 続浄全一九—七〇三a

(3) 十輪寺本、知恩院本の図版は『大勢至菩薩—祖師報恩のかたち—』（佛教大学宗教文化ミュージアム、二〇一七）に掲載されている。併せて参照されたい。

(4) 十輪寺本宝瓶御影上部賛は左記の通り。／は改行を示す。

法然本地身大勢至菩薩／為度衆生故顕置此道場／我毎日影向擁護／帰依衆必引導／極樂若我此願／念不令成就者／永不取正覚／讃州小松庄／生福寺銘文上人／造勢至菩薩造自造書之文／建暦元年（辛未）十一月廿日法然

(5) 中井真孝校注『新訂法然上人絵伝』（佛教大学宗教文化ミュージアム、二〇一二）三三頁参照。

(6) 浄全一九—四一六a

(7) 浄全二〇—三二一b

(8) 続浄全九—四一八b

(9) 「杜多」に関しては、阿部慈園『頭陀の研究』（春秋社、二〇〇一）を参考とした。

(10) 十輪寺所蔵本については、『高砂市史』第七卷(二〇〇五)で紹介されている。

〔付記〕

ご所蔵者様には、ご紹介から調査、展覧会への出陳に至るまで格別のご高配を賜った。遅々として進まない研究にも根気強くお待ち頂き激励を頂戴した。末筆ながら深甚の謝意を表します。

